

# 国語教科書の中の異性愛主義

## — 「目に見える制度」の中の「目に見えない制度」 —

小宮 明彦

「意識的に作られた制度、目に見える制度に劣らず重要なのは、歴史の中で私たち日本人によって無意識に作られた、目に見えない制度である。-略- 無意識な規範としての共通の言語体系、つまり国語も、そして共通のもの感じ方のシステムつまり感性構造も、この目に見えない制度なのだ。 - 略 -

たとえば、男女の愛の形について振り返ってみる。私たち日本人は、明治維新以後、とくに太平洋戦争後、男女の結びつきの在り方について、しばしば見合いによる結婚が古い封建的なもの、束縛された非人間的なものであり、それに対して自由な恋愛や恋愛結婚を近代的な新しいもの、人間的なものと考えてきた。 - 略 -

すなわち、近代的な恋愛こそ、私たち人間の本来の男女関係の在り方であり人間の自然である、と考えられている。しかしながら、現在私たちが言ういわゆる恋愛、近代的な恋愛の形式が成立したのは、A・モロワも言うように、十八世紀のフランスのサロンでのことであり、それはほかならぬ歴史的な近代の産物、つまり作られたもの、制度的なものだったのである。」(中村 2000:116-119)

### 1. 問題設定

20世紀末に見た性の多様性をめぐる社会状況の変動は、新世紀を迎えて、その動きの確かさをますます高めているように見える。

法務省・文部科学省による『人権教育・啓発白書 平成21年度人権教育及び人権啓発施策』(2010年版)には、「性的指向(異性愛、同性愛、両性愛)を理由とする偏見・差別をなくし、理解を深めるための啓発活動」および「性同一性障害者の人権」が「その他の人権問題」としてあげられおり、また、

子ども・若者育成支援推進本部（内閣府）によって決定された大綱「子ども・若者ビジョン」（2010年）では、「性同一性障害者や性的指向を理由として困難な状況に置かれている者等特に配慮が必要な子ども・若者に対する偏見・差別をなくし、理解を深めるための啓発活動を実施します」と明記するに至っている（渡辺：2011）。

このように、性的マイノリティの人権問題が「意識的に作られた」、「目に見える制度」に組み込まれたことは、記憶にとどめてられて良い。しかしながら、「意識的に作られた制度、目に見える制度に劣らず重要な」「歴史の中で私たち日本人によって無意識に作られた、目に見えない制度」は、今以って自覚されないまま私たちの感性や知性を形成せしめている。

本稿では、子どもたちの育ちに多大な影響を及ぼす学校教育の中でもとりわけ重要な位置を占める教科書に着目する。その中でも特に、様々な人間模様を含めて森羅万象が表象されていると考えられ、さらに、文学作品などにおいて読み手の子どもたちが感情移入することもある登場人物がおり、情操や知識体系に多大な影響を与えると考えられる現代文の教科書を素材とする。そして、「目に見える制度」としての国語（現代文）教科書（以下、国語教科書）に潜在する、「目に見えない制度」としての異性愛主義（ヘテロセクシズム）を目に見えるものとする、すなわち可視化することを試み、さらにそうした状況をめぐる今後の展望を提示する。

そのために、以下の手順を踏む。はじめに、先行研究を概観してこれまでの知見を整理する。次に、それを基に中等教育段階までの国語教科書の中でも、抽象度が高く様々な事象が最も複雑な形で表現され得ていると考えられる高校生の国語教科書を素材とする。量的に一定程度の信頼性を確保するために、市場占有率（出版労連教科書対策委員会：2000）がちょうど50%であった使用者数第3位までの国語教科書について、異性愛や同性愛などの性愛をめぐる記述・表象を調査し、おおまかな傾向を探る。次に、市場占有率第1位の教科書1冊を質的に分析し、教科書の中の異性愛主義を析出する。最後に、国語教科書における異性愛主義を相対化する具体的方法を提案する。

なお、本稿は、2001年に行われた日本子ども社会学会第8回大会（於：明

治学院大学)での報告要旨「国語教科書の中の異性愛主義—『目に見える制度』の中の『目に見えない制度』」に加筆修正を施したものである。

## 2. 先行研究の概観

ジェンダー視点から国語教科書を捉え直す試みは、戦後、蓄積されてきている(小宮近刊)。唐澤(1956:35-37)は、幕藩時代の教科書に関して、女子教育の内容と分量に批判的に言及している。佐藤(1977:39-51)は、国語教科書を使う側である教師と作る側である教科書会社の編集責任者への取材をもとに、国語教科書の男性中心性を指摘している。国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会 教育分科会(1979)は、国語などの教科書の中の性差別を告発し、その著作は、今から見れば、のちに続く(国語)教科書のジェンダー批評の原型を成している。その後、片岡(1987)、伊東他(1992)、21世紀教育問題研究会(1994)、有賀(1997)、森本(1998)、武田(1999)、関(1999)、佐竹(1999)、川合(2000)、金井(2001)、高槻ジェンダー研究ネットワーク(2002)、武田(2003)、牛山(2005)、松元(2005)などの労作が世に問われ、宇佐美(2008)をして「この二〇年間の教科書の取り組みは、男女の不平等やステレオタイプな描き方に対して一定の成果をあげてきたと言ってもよい」と言わしめるまでになっている。すなわち、小宮(近刊)でも触れているように、セクシュアリティを含めない狭義のジェンダーをめぐる教科書の変革は、一定程度達成されてきている。

しかしながら、セクシュアリティを含めた広義のジェンダー(小宮2001、井上ほか2002)をめぐる教科書の変革は進んでいるように見えない。すなわち、性差別(セクシズム)の観点からの教科書改良は徐々に進んでいるが、異性愛主義(ヘテロセクシズム)の観点からの教科書改良は進んでいない。

翻って、英国においては、英国の英語教師(すなわち「国語」の教師)であるサイモン・ハリス(Simon Harris)(1990)が、異性愛主義的な国語の授業空間を問題視し、それを乗り越える具体的方途の提案までを行っている。しかしながら、これは英国における国語の授業をめぐるの知見であり、日本の国語の授業、特に国語教科書に関する分析がなされているわけではない。

そこで本稿では、日本の国語教科書において異性愛主義を析出し、今後の展望を述べることを目指す。

### 3. 国語教科書の分析：異性愛主義傾向の析出

以下の3社から発行されている計11点の国語教科書を、性愛をめぐる記述の有無やその内容について調査した。

第一学習社：『高等学校改訂版新現代文』、『高等学校改訂版現代文1』、『高等学校改訂版現代文2』

大修館書店：『精選現代文』『高等学校新現代文改訂版』『新編現代文Ⅰ』『新編現代文Ⅱ』

明治書院：『現代文』、『精選現代文』『高等学校現代文』『新現代文』

その結果、11点すべてにおいて、異性間の性愛を表象あるいは示唆する記述が見られた一方で、同性間の性愛を表象あるいは示唆する記述は見られなかった。

### 4. 国語教科書の分析：『高等学校改訂版現代文2』を素材として

本章では、市場占有率第1位の第一学習社の教科書の中でも、高校3年生用の『高等学校改訂版現代文2』を分析対象とする。学年が上がるほど扱われる内容が広く深くなり、人間模様を含めた森羅万象を精細に描いていると考えられるからである。

#### 4.1 小説

本節では、本書に6編収められている小説について性愛をめぐる記述を検討する。登場人物、筋書き、性愛をめぐる記述を筆者が各小説の最初にまとめ、それに基づいて分析を加えていく。

##### 4.1.1 ミラクル 辻仁成

・登場人物…アル、(主人公の少年)、シド(アルの父親)、ミナ(シドと

同じ店の看板歌手)、その他

- ・筋書き…アルの母はジャズクラブの歌手だったが、彼の出産とともにその命を落としてしまう。父のシドは、同じクラブでピアノを弾いていたが、妻の死をいつまでも認めることができず、酒におぼれるようになっていく。成長して物心ついたアルが、自分に母親が不在であることをいぶかるようになったとき、シドはうろたえ、母親は世界中の街を旅して歌っており、「雪の降る日」に戻ってくると、アルに嘘をついてしまう。しかし、少しずつ大人に近づいているアルはシドに問う。「ママは本当に生きているの？（中略）パパ本当のこと教えてよ」。しかし、シドはジャズクラブの看板歌手ミナの力を借りて、アルに嘘をつき通そうとする。そんなある日、空から雪が舞うように散ってくる。その日、奇跡（ミラクル）が起こる。

- ・性愛をめぐる記述

①p. 44下段11. 2～12

海から吹きつけてくる風はやや冷たい空気を含んでいた。ミナの身体がピッタリとシドにくっつく。シドは死んだ妻とミナがダブって見えた。女のぬくもりが伝わってくる。

「ピアノ？」

シドがそう笑うと、ミナもつられて笑った。

「ええ、もったいないわ。あなたはすばらしいピアニストなのに。それに男前だし。」

ミナは彼の腕を支えたまま、そう言って笑った。シドはなんと聞いていいかわからなかった。ミナの温かい手がシドの手を握った。

- ・分析：本小説は、妻（少年アルにとっての母）を失った夫（同じく父）と、その息子である主人公の少年アルを中心とした、温かい人間信頼が物語の基底を成している小説である。母、父、息子から成る近代家族の親密な情緒の紐帯が物語の重要な成因である。近代家族とは、保護と教育の対象として誕生した子どもを中心として、夫婦・親子が深い情緒的

絆で結ばれた、親密で私的で家内的な家族である（井上他2002:178）。また、現在のジェンダーのあり方を規定している社会制度である、男女の異質性を強調する性別観、女性の家庭役割や母親役割を神聖視するイデオロギー、家族を社会の単位とする法などは、近代家族とともに形成された（井上2002:178）。男女の異質性を強調する性別観の根底に異性愛主義があること（小宮:2001）を思い起こしても、また、異性同士の対関係とその間にできた子どもが近代家族の要件であることを考えても、本小説の構図自体が、異性愛主義と親和的である。

性愛をめぐる記述として、上に引用したように、「ミナの身体がピッタリとシドにくっつき、シドにミナの「女のぬくもりが伝わってくる」ことが述べられている。ミナとシド二人きりの場面でミナはシドを男前だと言い、それに対して「なんと言っていていいかわからなかった」シドの手を、その後、「ミナの温かい手が」握ったと述べられており、女性から男性へのしっとりとした愛情が描かれている。

#### 4.1.2 ウサギ 南木佳士

- ・登場人物…語り手、少年（語り手の少年時代）、清子、その他
- ・筋書き…妻、二人の息子、父と暮らす語り手の現在の日常と、語り手の少年時代の回想という、入れ子構造を成している。初めと終わりに現在の日常を配置しつつ、物語の大半は回想から成る。群馬の山村に住む少年は、わがままだが学業では誰にも負けなかった。そこへ清子という転校生がやって来た。清子は、五十メートル走ではクラスの新記録を作り、テストではいつも百点を取り、その上容姿も申し分ない。そんな清子への反感は、ある事件を経て恋心へと移ろう。

- ・性愛をめぐる記述

##### ①p. 60 1. 15

清子のばかやろうめ、と胸の中で悪態をつきながらも、その愛らしい笑顔の前になると頬を赤くして伏し目になってしまった。

##### ②p. 62 下段1. 16～p. 63下段1. 8

黙っていてくれたのは清子なのだと思うと、彼女に大きな借りができてしまった気がして嫉妬が消え、愛らしさに加えてその懐の深さに対する恋心に似たあこがれの念ばかりが増大していった。だが、面と向かうと何も話せなかった。フォークダンスで手をつなぐと胸が苦しくなった。

六年生の秋、日曜の午後、いたたまれなくなって清子の家を見に行った。小学校の裏道を歩いて一時間余り、途中で栗やトチの実を拾いながら山の中を行くと、川に沿って小さな発電所があり、平屋の住宅が六戸並んでいた。道端の石に腰掛け、爪を立てて栗の実の渋を取りながら、日の暮れるまで谷間の集落を見下ろしていた。あそこに清子が住んで飯を食い、風呂に入って暮らしているのだと想像すると、渋皮の残る生栗でさえ口に含むとほのかに甘く感じられたものだった。

森を吹き抜ける風が降り積もった落ち葉を舞い上げ、背筋に寒気が忍び寄ってはいたが、不思議に寂しくなかった。秋の夕暮れの空気を清子と共有しているのだと思い込むと、それまでに感じたことのない甘酸っぱい疼きを体のしんに覚えるのだった。

振り返ってみると、これが初恋だった。

中学に上がる春、清子は転校して行ってしまった。彼女のいなくなった学校にはなんの興味もなくなっていたので、中学2年になるとき、東京に出ていた父からこちらに来ないかと誘われて、すぐに同意した。

③ p. 64下段1.7～p. 65上段1.9

成績順にA組からF組にまで分かれており、各クラス二百名の生徒がいる大規模な予備校だった。自分の属する三階のC組から五階のA組まで走って上り、清子を捜した。窓際の、前から五列目の席に座ってサンドイッチを食べている髪の長い女の子。なんと呼びかければいいのかわからなかった。

「よお。」

と、前に回って手をあげた。

「あら。」

清子はサンドイッチを含んだ口に手を当てて目を丸く開いた。

数えれば七年ぶりの再会になるのだが、清子は体型が女らしく丸みを帯び、小学生のころと変わらない白い肌と整った顔立ちがまぶしかった。昼休みだったので、四人掛けの長椅子には清子しか座っていないかった。しかし、C組の劣等生がA組の美しすぎる才女の横に腰を下ろすのはためらわれた。

「どこかで話さないかい。」

直立したまま辛うじて言葉を組み立てた。

「いいわよ。三時に玄関ホールで待ち合わせましょうよ。」

清子はぎこちない笑顔を作った。

④ p. 66上段1. 10～p. 66下段1. 3

「だから、とても懐かしいんだけど、こうして会うのは今日だけにしましょうね。」

清子はコーヒークップにミルクを注ぎながら淡々と言った。

別にそんなつもりは、ただ名前を見て懐かしくて……。急いでいたたまれなさを取り繕う一言を探したが見つからなかったの、

「そうだよな。受験生だものな。」

と、まじめくさった顔をこしらえたものだった。

実のところは、再会の勢いに任せて、一段と美しくなった清子に初恋の告白でもしようかともくろんでいたのだが、期待はみごとに裏切られてしまった。

- ・分析…語り手である主人公が大人になり、妻、二人の息子、父と暮らす現在の日常の中に、語り手の少年時代の回想が収められているが、その入れ子構造の内も外も近代家族を描写している。また、少年時代の主人公は、転校生の清子の「愛らしい笑顔の前には頬を赤くして伏し目になってしまった」り、「フォークダンスで手をつなぐと胸が苦しくな



った」りした。「秋の夕暮れの空気を清子と共有しているのだと思ひ込むと、それまでに感じたことのない甘酸っぱい疼きを体のしんに覚え、「振り返ってみると、これが初恋だった」。美しい思春期<sup>(1)</sup>の物語である。

#### 4.1.3 舞姫 森鷗外

- ・登場人物…太田豊太郎、エリス、他
- ・筋書き…ドイツ留学中のエリート官僚の太田豊太郎は、偶然貧しい舞姫エリスと知り合い、エリスは豊太郎との子を身ごもった。しかし、旧知の友の勧めによって、豊太郎は結局、エリスとの生活ではなく、日本で官僚として生きることを選ぶ。それを知ったエリスは、パラノイアになる。
- ・性愛をめぐる記述

①p. 119 11. 3-4

彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅<sup>うすくれない</sup>を潮したり。手足のか細くたをやかなるは、貧家の女<sup>をみな</sup>に似ず。

②p. 120 11. 9-10

余と少女との交はりやうやくしげくなりもてゆきて、(略)。

③p. 121 1. 8

余とエリスとの交際は、このときまではよそ目に見るより清白なりき。

④p. 122 11. 14-15

ああ、詳しくここに写さんも要なけれど、余が彼を愛づる心のはかに強くなりて、つひに離れがたき仲となりしはこの折なりき。

⑤p. 124 11. 2-5

彼はいかに母を説き動かしけん、余は彼ら親子の家に寄寓<sup>ききゅう</sup>することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、あるかなきかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。

⑥p. 126 11. 13-16

エリスは二、三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に助けられて

帰り来しが、それより心地悪しとて休み、物食うごとに吐くを、悪阻  
といふものならんと初めて心づきしは母なりき。

⑦p. 137 11. 5-6

彼が一声叫びて我が項を抱きしを見て駄丁はあきれたる面もちにて、  
何やらん髭のうちにて言ひしが聞こえず。

⑧p. 137 11. 11-12

余は彼を抱き、彼の頭は我が肩に寄りて、彼が喜びの涙ははらはら  
と肩の上に落ちぬ。

- ・分析…主人公太田豊太郎は、「優れて美」しいエリスとの交わりもしげ  
くなり、「つひに離れがたき仲となり」、「彼ら親子の家に寄寓すること  
となり」、「憂きが中にも楽しい月日を送」っていたところ、エリスが悪  
阻をおぼえるまでになる。ドイツ女性のエリスは、太田との子どもを身  
ごもったまま、日本での栄達を優先した太田に捨てられるという、極め  
て理不尽かつ暴力的な構成である。明治の時代から定番の男性優位主義  
的異性愛小説である。

#### 4. 1. 4 七番目の男 村上春樹

- ・登場人物…語り手、少年（語り手の少年時代）、K（少年の友達）、その  
他
- ・筋書き…「その波が私をとらえようとしたのは、私が十歳の年の、九月  
の午後のことでした」とその夜に話をすることになっていた最後となる  
七番目の男は静かな声で切り出した。彼は海辺の町で不自由のない生活  
を送っており、一学年下のKとよく遊んでいた。ある日、その町を台風  
が通過した。彼とKは海辺にいたが、すさまじい波が二人を襲った。彼  
は、思いとは裏腹に、Kを残したまま防波堤に向かって逃げて助かった  
が、Kは波に飲み込まれてしまった。時が経っても、このことは彼の  
中で恐怖として生き続け、現在に至っている。
- ・性愛をめぐる記述

①p. 239 下段11. 3-10

あの町を離れてしばらくしてからは、もう以前のように頻繁には悪夢を見ないようにになりました。しかしそれが私の生活から去っていったというわけではありません。それは時折、集金人がドアをたたくように、私のところにやってきました。忘れかけたところにちゃんとやってくるのです。いつもいつも全く同じ夢です。細部までぴたりと同じです。そのたびに私は悲鳴を上げて目を覚ましました。布団を汗でぐっしょりとぬらしました。結婚しなかったのは、おそらくそのせいかもしれませんね。私は夜中の二時か三時に大声を張り上げて、そばにいただれかを起こしたくはなかったのです。私にはこれまでに好きになった女性も何人かおりました。しかしだれとも一夜をともにしたことはありません。

- ・分析…物語の構成として異性愛が前面に出ているわけではないが、「結婚しなかったのは、おそらくそのせいかもしれませんね」などという、そのような理由でもなければ結婚(異性婚)していたかのような描写は、読み手に結婚することを当然視させる働きをする。

#### 4. 1. 5 黒い雨 井伏鱒二

- ・登場人物…閑間重松、姪の矢須子、高橋夫人、工場長、その他
- ・筋書き…広島市から「四十何里東方」にある小島村の閑間重松は、ここ数年、姪の矢須子のことで心に負担を感じてきた。矢須子を娘ぶんとして市内に呼び寄せた重松としては、矢須子が原爆病患者であるというあらぬ噂を立てられて縁遠いからである。そんな折、矢須子に願ってもない縁談が持ち上がった。重松は今度こそ原爆病の噂で話が流れないように、矢須子が被爆していないことを証明するために、彼女の健康診断書とともに、昭和二十年八月以降の矢須子の日記を清書して仲人に送ろうと考えた。そして、原爆が落とされた時とその後の描写が繰り広げられる。

・性愛をめぐる記述

① p. 247 11. 2-3

戦争末期、広島市内の重松の家に同居していた矢須子が、(中略)縁遠いからである。

② p. 247 11. 6-8

しかし、矢須子を娘ぶんとして市内に呼び寄せた重松としては、彼女の縁遠いことが負い目になっている。終戦後四年十か月目に、矢須子に願ってもないような縁談が持ち上がった。

③ p. 266 11. 6-7

それまで縁談が急速に進みつつあった矢須子は、原爆病の症状を現し始めた。

- ・分析…小説の後に付された解説によれば、「黒い雨」は昭和四十年に「姪の結婚」という題で書き始められ、雑誌連載の途中で改題された。そのことからわかるように、原爆後の黒い雨と姪の結婚を主題とした物語である。「d. 七番目の男」と同様に、尋常ならざる理由でもなければ人は結婚する(できる)ものだという価値観が読み取れる。

#### 4. 1. 6 大望の客 ナサニエル・ホーソン

- ・登場人物…母親、父親、子どもたち、老婆、若者、その他
- ・筋書き…容赦なく厳しい自然の中で、宿屋を営んでいる一家がある。母親も父親もおばあさんも子どもたちも、みんな幸せに暮らしている。そこへ、大望を抱いた若者が訪れる。初めのうちはもの憂げで、ほとんど意気消沈していた若者は、一家の懇ろなもてなしを受け、間もなく明るくなる。一家の者は、そしてこの若者は、思い思いに未来への希望を語り合う。おばあさんの語りにみんなが注目しているとき、山崩れが起こる。一家と若者は、破滅の大瀑布の下に消える。
- ・性愛をめぐる語句や文章

① p. 307 下段11. 6-8

そして、独り者ならば、寝る時間を一時間遅らせて、おやすみの前に、山の娘とそっと接吻したであろう。

② p. 313下段1. 10-p. 314下段1. 8

だがそのとき、娘の心をかすかな雲が通り過ぎたのであった。彼女は、まじめに火をのぞき込みながら、ため息と紛れそうな息をついた。それを抑えようと少し努力したけれども、無理に出してしまった。そこで驚き、顔を赤らめながら、娘は自分の心の中を見抜かれたかしらと、周りの者をすばやく見回した。見知らぬ客は、娘が何を考えていたかと尋ねた。

「なんでもありませんわ。ちょうどあのとき、ほんのちょっと寂しい気分になっただけですの。」と彼女は答えて、下を向いてほほえんだ。

「そうですか。私にはいつも、他人の心を感じる才能があるんですよ。」と彼は半ばまじめに言った。「あなたの秘密を言ってみましょうか。若い娘さんが、暖かい炉端で震えたり、お母さまの傍らで寂しいと訴えたりするのは、それがどんなことなのか、私はよく心得ていますよ。この気持ちを言葉で言ってみましょうか。」

「それを言葉に言い表したならば、もはや娘の気持ちとは申せませんわ。」とこの山のニンフは、笑いながら答えたけれども、若者のまなざしを避けていた。

以上はすべて、二人だけで話された。おそらく、二人の心に恋の若芽が萌え出していたのであろう。それは非常に清らかで、この地上では成熟することができず、楽園で花を開いたのかもしれない。女性は、彼のような優しい威厳のある態度を尊敬する。一方、誇り高く、考え深く、それでいて心の優しい男子は、必ずと言ってよいほど、彼女のような素朴な感じに心を奪われてしまうものである。しかし、二人はひそひそと語り合い、男は、少女に特有の楽しい悲しみや、優しい陰影や、内気なあこがれなどを見守っていたが、山峡を吹き抜ける風はいよいよ強気になってきた。

- ・分析…舞台となる宿屋では、「旅客は食事と宿泊のお金を払いさえすれば、値の知れぬほど貴重な家族待遇を受けた」。その宿屋を、若い男性が訪れた。「十七になる『幸福』の生き姿」である娘と、二人だけで言葉を交わしたあと、「おそらく、二人の心に恋の若芽が萌え出ている」。大望を抱く若い男性と『幸福』の生き姿である娘の異性愛関係に一定の重心を置いて描かれた作品である。

#### 4.1.7 「4.1 小説」のまとめ

本教科書の6編の小説のうち、「七番目の男」と「黒い雨」を除く4編に、登場人物たちによるあからさまな異性愛関係や異性間の恋慕の機微が描かれている。その上、先述したように、「七番目の男」と「黒い雨」には、登場人物が結婚できない特別な理由が描かれている。筆者は、6編の小説を性愛に着目して精査した結果、国語教科書とは、異性愛の教科書でもあるのではないかという思いに至っている。

### 4.2 評論

本節では、評論において性愛をめぐる表現を析出する。筋書は省略する。特筆すべき表現がない場合は、題名のみを挙げる。

#### 4.2.1 「共生」とは何か

近代家族の写真が提示されている (p. 23 : 写真1 参照)。

##### 写真1



「自然」を求める人々 (千葉県奥老溪谷)

#### 4.2.2 新しいパラダイムを求めて

#### 4.2.3 写真の中の笑い

結婚式の写真が提示されている (p.75 : 写真2 参照)。

写真2



結婚式のスナップ写真

#### 4.2.4 面とペルソナ

女と男の対の写真が提示されている (p.86 : 写真3 参照)。

写真3



#### 4.2.5 ピカソを一点買う

・性愛をめぐる記述

p.155 11.2-12

たとえばドガは、なぜ浴槽の女やバレリーナや馬にあれほど関心を持ったのか。彼は決して、自分の絵の主な目的として、浴槽の女のなまめかしさやバレリーナの愛らしさを描きたかったわけではない。そういう動機も当然少しはあっただろうが、むしろ人嫌いで有名だったこの知的な画家を深く魅了したのは、「人体」の運動を抽出し、(後略)。

#### 4. 2. 6 コモン・センスとは何か

#### 4. 2. 7 衣服の記号論

##### ・性愛をめぐる記述

p. 180 11. 12-13

これは、かつての、年齢や未・既婚の別を表示した衣服の機能に対応していると言えよう。

#### 4. 2. 8 天の自然詠・地の風景詠

#### 4. 2. 9 季語について

##### ・性愛をめぐる記述

① pp. 213 1. 4

ダンスを踊る二人は淡いピンクと黒の残像を引きながら刻々と消えてゆく。

② pp. 220 11. 8-10

これは七夕伝説の中に、この日、雨が降ると天の川の水が増して、牽牛、織女の二つの星の出会いが妨げられるという部分があって、(後略)。

#### 4. 2. 10 癒しとしての死の哲学

#### 4. 2. 11 現代日本の開化

#### 4. 2. 12 「4. 2 評論」のまとめ

評論においても、主題や筋書きに直接関係ないところでも異性愛の当然視が行われている。例えば、4. 2. 5「ピカソを一点買う」にあるように、ドガにおける「浴槽の女のなまめかし」さをドガの創作動機として当然視している。こうした表現は、小宮(近刊)で論じているように、異性愛主義的な読



者共同体の形成に加担する。なお、バレンタイン（1993）によるジェンダー地理学の知見によれば、異性愛というセクシュアリティは、単に私的空間における性行為によってのみ定義されるものでなく、大部分の日常的環境の中で作用している権力関係の一過程である。日常が異性愛の空間的ヘゲモニーに占拠されているとするならば、そうした空間を、そうした空間の中で描く評論も、異性愛ヘゲモニーの影響を免れないのは当然ではあろう。

### 4.3 随想

本節では、随想において性愛をめぐる表現を析出する。筋書きは省略する。特筆すべき表現がない場合は、題名のみを挙げる。

#### 4.3.1 チェスで人は敗れたのか

#### 4.3.2 僕の俳優修行

#### 4.3.3 悪人礼賛

- ・性愛をめぐる語句や文章

p. 190 11.5-8

金は要らぬ、名誉は要らぬ、自分はただ無欲でしてと、こんな大それた言葉を軽々しく口にできる人間ほど、僕をしてあくびを催させる存在はない。それに反して、金が好きで、女が好きで、名誉心が強くて、利得になることならなんでもする、という人たちほど、僕は付き合いやすい人間を知らぬのだ。だいいち、さばさばしていて気持ちがよい。安心してつき合える。金が好きでも、僕に金さえなければ取られる心配はないし、女が好きでも、僕が男である限り迷惑をこうむる恐れはない。

#### 4.3.4 木のあやしさ

#### 4.3.5 「4.3 随想」のまとめ

「4.2評論」のまとめと同様、その随想の本旨ではないところで異性愛を当然視する規範、すなわち異性愛主義が顔を出しており、異性愛主義的な読者

共同体の形成に加担している。また、「4.3.3 悪人礼賛」で著者が言う「人(間(たち))」とは「男(たち)」のことであり、往時の人間観・世界観を偲ばせる表現ではある。

#### 4.4 詩

##### 4.4.1 自然の背後に隠れて居る

##### 4.4.2 落下傘

##### 4.4.3 足と心

##### 4.4.4 ちがう人間ですよ

##### 4.4.5 「4.4 詩」のまとめ

ここでは、父性の表出がない一方で母性の表出があったり、伝統的なジェンダー類型に即した人物描写があったりするなど、セクシュアリティを含まない狭義のジェンダー視点から課題となる表現が見られた。このことは、セクシュアリティがジェンダーの一要件であること(小宮:2001)を考えれば重要な点ではあるが、それらは第1章で見た先行研究で論じられており、また本稿ではセクシュアリティの表象に焦点化して分析しているので、ここでは追究/追及しない。

#### 5. 結論

今回分析した高等学校の国語教科書には、異性愛家族(へ)の言及/表象/示唆、異性との性愛・恋愛(へ)の言及/表象/示唆がある一方、同性との性愛・恋愛(へ)の言及/表象/示唆は全くない。その意味において、高等学校の国語教科書は異性愛主義を潜在させていることが明らかとなった。

#### 6. 展望

異性愛以外の性愛を耳にしたときの一般の人々の驚愕、拒絶感、嫌悪感は、概して小さくない。そして、それを裏返した分だけ、同性愛者は異性愛主義社会において拒絶され、嫌悪されていると感じているのではなかろうか。このことは、学校教育を受けている子どもたちにもあてはまろう。「心が破け

てしまいそう」(伊藤:1978)な思いを抱えたまま異性愛主義社会の中で煩悶している子どもたち・若者たちは少なくない(加藤ほか:2010、稲葉:2010、杉田:2011)。異性愛以外の性愛を否定的に感受する心性の土台は、本稿で明らかにしてきたような異性愛主義的なテキストによって形成されている可能性が示唆される。

さて、国語教科書の中の異性愛主義を相対化するには、どうしたらよいだろう。フェミニズム批評では、読み手としての女性に重点をおく「フェミニスト・クリティーク」と、書き手としての女性に注目する「ガイノクリティクス」がある。これにならってまず、読み手としての同性愛者に重点をおく、「クィア・リーディング」にまつわる教材の導入を提案する。例えば、大橋(2006)には、英国の歌手、エルトン・ジョンの名曲「Your Song (君の歌は僕の歌)」をクィア・リーディングしたクィア批評解説が収められている。これでクィア批評を学んだあと、生徒は、例えば日本の歌手、槇原敬之による詞のクィア・リーディングを試みることができる。次に、「ガイノクリティクス」にならって、書き手としての<sup>男性同性愛者</sup>ゲイ・メンと<sup>女性同性愛者</sup>ゲイ・ウィミン<sup>(2)</sup>に重点をおく「ゲイのクリティクス」を提案する。例えば、三島(1950)、掛札(1992)、石川(2002)、尾辻(2005)などはどうだろう。森鷗外の異性愛青春小説「舞姫」が国語教科書の定番教材であるなら、三島由紀夫の同性愛青春小説『仮面の告白』が取り上げられてもよい。

そう思いながら教育現場に目を向ければ、2011年現在、神奈川県にある日本女子大学付属高等学校では、3年生の国語で三島由紀夫の『仮面の告白』を読んでいる<sup>(3)</sup>。20年以上前には、埼玉県立高校国語教諭(当時)の高柳美知子が、同性に恋する青年の青春記であるジョン・フォックスの『潮騒の少年』(新潮社)を生徒に紹介している<sup>(4)</sup>。しかしながら、有志の努力に頼るだけでは、いかにも不十分である。こうした教材の教科書への採用が望まれよう。

現在、平和を希求する平和教材やしょうがいと社会を論じるバリア・フリー教材<sup>(5)</sup>(石原2009:191)などが国語教科書に収められている。こうした動向を思い起こせば、例えば、「ろう者で性同一性障害」の「27歳の心の葛藤」

を描いた専門学校講師<sup>おがたえいあき</sup>緒方英秋の自伝『私、わたし—ろう者で性同一性障害 27歳の心の葛藤』(講談社)などはどうだろう。異性愛や同性愛などの性的指向と性同一性障害は位相の異なる概念であるが、それでも性の多様性の尊重という点では、読者に訴えるものが大きいと考える。

本稿では、国語教科書の中の異性愛主義を可視化し、若干の分析を加え、今後の展望を述べた。

今後の課題は、異性愛主義をめぐっての最新の国語教科書の精査である。その際には、教科書会社発行の指導書にも目配りをしてより深く精緻な議論・分析を試みたい。

#### 注

- (1) 思春期とは、金田一他(1997)によれば、からだが成長し、物に感じやすくなり、特に異性に対する関心が強くなる年ごろ(傍点は小宮)。
- (2) ゲイという語について、詳しくはDynes(1990)やHogan(1998)を参照されたい。
- (3) 神奈川県にある日本女子大学付属高校では、少なくとも五、六年前から、高校三年生で『仮面の告白』を読んでいる(2011年11月12日に日本女子大学付属中学校・高等学校で行われた第16回全国私立大学付属・併設中学校・高等学校教育研究集会での、同校国語科添谷陽子教諭の発言より)。
- (4) 高柳は当時の心境を、「(教科書には)男と女の話しかないんですよ。男同士、女同士もあるということをどうしても言いたかったので(言った)」と証言している(2011年10月28日、高柳との電話インタビューより)。
- (5) 例えば、中学校の教科書ではあるが、元杉並区小学校教員でスポーツライターの乙武洋匡の『五体不満足』からの抜粋で、「心のバリアフリー」が学校図書『中学校国語1』に採録されている。

#### 参考文献

- 有賀千恵子(1997)「不可視の『女』:国語教育『定説』」『日米女性ジャーナル』21 pp. 96-109  
石川大我(2002)『ボクの彼はどこにいる?』講談社  
石原千秋(2009)『国語教科書の中の「日本」』筑摩書房

- 伊藤文学(1978)『心が破けてしまいそう—親・兄妹にも言えないこの苦しみはなんだ』光風社
- 伊東良徳他編(1992)『教科書の中の男女差別』明石書店
- 稲葉昭子(2010)「学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ」『創価大学大学院紀要』32 pp. 259-280
- 井上輝子他編(2002)『岩波女性学事典』岩波書店 p. 37
- 宇佐美毅(2008)「ジェンダーから見る国語教科書」『國文学—解釈と教材の研究』9 [特集 =教科書徹底研究] p. 6
- 牛山恵(2005)「小学校教科書とジェンダー」『都留文科大学研究紀要』61 pp. 23-43
- 大橋洋一編(2006)『現代批評理論のすべて』新書館
- 尾辻かな子(2005)『カミングアウト—自分らしさを見つける旅』講談社
- 掛札悠子(1992)『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社
- 片岡徳雄編(1987)『教科書の社会学的研究』福村出版
- 加藤慶他編(2010)『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援』開成出版
- 金井景子(2001)『ジェンダー・フリー教材の試み—国語にできること』学文社
- 唐澤富太郎(1956)『教科書の歴史—教科書と日本人の形成』創文社
- 川合真由美(2000)「ある学校の現場から—国立市立小学校の実践」『学校をジェンダー・フリーに』明石書店 pp. 41-58
- 金田一京助他編(1997)『新明解国語辞典』第5版 三省堂
- 国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会 教育分科会(1979)『女はこうして作られる—教科書の中の性差別』
- 小宮明彦(2001)「包括的ジェンダー論教育に向けて—(性的)マイノリティを疎外しないジェンダー論教育を」『現代性教育研究月報』19-7 pp. 8-12
- 小宮明彦(近刊)「このテキストにジェンダーはありますか—批評理論、国語教科書、性の政治学」『民主教育研究所年報』10
- 佐竹久仁子(1999)『「女ことば／男ことば」規範をめぐる—小学校国語の場合』『ことば』20 pp. 44-51
- 佐藤洋子(1977)『女の子はつくられる—教育現場からのレポート』白石書店
- 出版労連教科書対策委員会(2000)『教科書レポート2000』44 p. 64 日本出版労働組合連

合会

- ジョン・フォックス(越川芳明訳)(1989)『潮騒の少年』新潮社
- 杉田真衣(2011)「地方に生きる若年同性愛男性の学校体験」『生活指導』686 pp.98-101
- 関礼子(1999)「テキスト・共同体・教育者—文学教材をめぐるジェンダー抗争」『教育学年報7ジェンダーと教育』世織書房 pp.267-293
- 高槻ジェンダーネットワーク(2002)『2001年度高槻市男女共同参画に関する活動補助金事業 中学校教科書のジェンダー・チェック』
- 武田憲幸(1999)「教科書の検討—小説教材を読みかえる」橋本紀子他編『両性の平等と学校教育—ジェンダーの視点からの授業づくり』東研出版 pp.162-172
- 武田憲幸(2003)「高等学校の国語教科書にみられるジェンダー問題」『日本ジェンダー研究』6 pp.13-26
- 中村雄二郎(2000)「目に見える制度と目に見えない制度」『改訂版現代文1』pp.116-119 第一学習社
- 21世紀問題研究会編(1994)『小学校全教科書の分析—自立と共生の教育の視点から』労働教育センター
- バレンタイン、ジル(1998)「(異)性愛化した空間—日常空間に対するレズビアン知覚と経験」(福田珠己訳)『空間・社会・地理思想』3 pp.77-95 大阪市立大学地理学教室 (Valentine, Gill. "(Hetero) sexing space: Lesbian Perceptions and Experiences of Everyday Spaces." *Society and Space*.11. 1993. pp.395-413)
- 松元敬子(2005)「ジェンダーからみた中学国語教科書—教科書が伝える男女観と未来像」『日本語とジェンダー』5  
[http://www.gender.jp/journal/no5/5\\_matsumoto.html](http://www.gender.jp/journal/no5/5_matsumoto.html) (日本語ジェンダー学会ホームページより。2011年11月14日閲覧。)
- 三島由紀夫(1950)『仮面の告白』新潮社
- 森本エリ子(1998)「ジェンダーを再生産する文学教材—自我形成期の子どもたちが読み取るもの」『女性学』6 pp.30-45
- 渡辺大輔(2011)「日本の性的少数者をめぐる社会環境と課題」橋本紀子監訳『みんな大切!—多様な性と教育』p.178 新科学出版社
- Dynes, Wyane R. et al.(1990) *Encyclopedia of Homosexuality*. New York: Garland

Publishing.

Harris, Simon(1991) *Lesbian and Gay Issues in the English Classroom*. Open University Press.

Hogan, Steve and Hudson, Lee.(1998) *Completely Queer-the Gay and Lesbian encyclopedia*. New York: Holt and Company.

(こみや あきひこ・女子栄養大学)